

アニメーション映画『ドラえもん』に現れた子どもたちの人間関係

吉田 大輝

核家族化や女性の社会進出など現代日本における社会情勢や、ゆとり教育や生きる力といった教育方針は、子どもたちの人間関係にも大きな影響を与えてきたと考えられる。また、こうした子どもたちを取り巻く社会の変化は映像メディア、特に子どもたちを主な対象視聴者層とした子ども向けアニメーション作品にも映し出されるといわれている。なかでもアニメーション映画『ドラえもん』シリーズは、1980年以來38年間に渡り、定期的に制作され、上映されており、日本社会における子どもたちの様相を映し出してきたと評されている。

アニメーション作品を分析した先行研究には、性ステレオタイプの描写を検討して男性像・女性像の分析をしたものや、ディズニープリンセスにおけるジェンダー描写の変化を分析したものがあるが、1つの作品シリーズを対象に詳細に分析した研究は、ほとんど見当たらない。そこで、本研究は、アニメーション映画『ドラえもん』シリーズ全38作品を対象とし、通時的分析によって、そこに映し出された、日本社会における子どもたちの人間関係を考察することを目的とした。

調査と分析は、作品ごとに登場人物の男女別人数や親子間の会話時間量などを計測する定量的分析と、物語展開やセリフなどの特徴に基づく定性的分析を組み合わせ進めた。また、アニメーション映画『ドラえもん』シリーズは、声優の交代、リメイク作品制作の有無、空白年度の存在などの観点に基づき、2005年を境として二つの時期に分けることができることから、本研究では、それぞれを前期、後期とした上で、両者を比較して分析し、考察した。

その結果、前期に比べて後期では、男の子、女の子ともに登場人物の数が増え、親子間の会話時間も増加したこと、後期には男女混ざって放課後で遊ぶ様子や、男の子の恋愛感情といった、前期にほとんど見られなかった描写が出現したことが明らかになった。さらに、前期の作品では大人が解決していたような複雑な問題を、後期のリメイク版では子どもたちが協力して解決するようになったことや、女性の登場人物において、王女や姫、島の管理人、料理長というように社会的役割を果たす存在が現れることも明らかになった。

これらのことから、アニメーション映画『ドラえもん』では、前期よりも後期で、子どもたちがより広範で複雑な人間関係を形成する傾向にあること、家族の絆がより重要視されていること、また、問題に対処するにあたって子どもたちが自力で解決する姿勢に重きが置かれるようになったこと、および、社会的役割を果たす女性が登場し、性ステレオタイプの役割分担に変化が生じていることなどが、現代日本における子どもたちの人間関係として映し出されていると考えられる。

(指導教員 辻泰明)